

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

ぎふ清流国体での優勝報告

■ 山岳競技 ■ 成年男子リード

中嶋 徹 (信州大学) ・ 笠原 大輔 (Edge and sofa)

この年度早稲田山岳競技リード成年男子で優勝することが出来ました。笠原大輔、中嶋徹のペアで成年の部に挑むのは今年が初めてで、今年の国体は

成年の部における自分達の實力を確かめ、来年からの競技に繋げることを第一目標にしていたので、王冠優勝できると思ってもみませんでした。中嶋は8



月から9月にかけて行った遠征後選手が低体力で、笠原は十分な準備が出来ていない状態でしたが、大会当日は二人ともスムーズに体が動き、納得のいく結果を出せたことが山に来ました。またボルダリング成年男子においては、2位で優勝は逃しましたが、結果には非常に満足しています。ここ数年互いに刺

刺し合いながらトレーニングに励んできた結果を今年介体できたことを嬉しく思います。来年も優勝を狙う事は十分できると思いますので、具体的トレーニングの計画を立て、互いに練習に励んでいこうと思います。

長野県では実戦向きの練習を行えるリードの練習場がなく、競技者が育ちにくい状態にあります。また現状として少女の競技者はほとんどおらず、人材の発掘が必要な状態です。現時点で入賞を目指す非常に難しいように感じます。今回の成果で若い世代の意欲を刺激できれば嬉しいですね。また、合行などが揃って育成に力を入れて欲しいと思います。

応援していただいた方々には非常に感謝しています。自分が国体で優勝出来たことと共にここまで来る事が出来たことを嬉しく思い、私が山岳競技を愛用して以来、昔中を押し、手を差し伸べてくださった全ての方に感謝しています。



山岳
成年男子：リード
中嶋 徹 選手 (信州大学) 左
笠原 大輔 選手 (Edge and sofa) 右

県体協だより第241号の記事を転載しました。かわらばん470号でも触れたが、ここ数年森山副会長、浮須国体委員長、中嶋スポーツライティング委員長を中心としたプロジェクトの成果が結実した。文章の中で二人が触れているように、「長野県には実戦向きの練習を行えるリードの練習場はない」中、外岩を登ることで実力をつけてきた長山協の実戦は王道と言ってもいいのではないかと思います。長山協としては十分なバックアップもできない中、先に挙げた三人の方をはじめとする関係の皆さんのご尽力には改

めて敬意を表したい。願わくば、彼らに続く第2、第3の選手が育たんことを。

アグルーカの行方 角幡唯介著 (集英社刊)

探検家「角幡唯介」氏の3作目が出版された。19世紀中頃、北極に消えたフランクリン隊の足跡を追う103日間、1600kmの徒歩旅行の記録がそれだ。1845年イギリスの探検家ジョン・フランクリンは大西洋からベーリング海に抜ける北西航路の発見のため、隊員129名を率いて探検に向かった。しかし、彼らの一人として無事に故国に帰った者

はなかった。探検隊を派遣した英国海軍は捜索隊を次々とカナダ北極圏に向かわせたが、手がかりは全く得られなかった。

行方が分かったのは出発から 10 年近くが経った頃だった。ある探検家が北極の先住民イヌイトから、彼らの悲惨な最期を物語る生々しい証言を聞き出したのだ。それから 5 年後、今度は別の探検隊がフランクリン隊の隊員自身の手による 1 枚のメモ書きを発見した。それらの証拠から、どうやら 129 人の隊員は全員、極北カナダの凍てつく荒野のどこかで命を落としていたことが分かったのだ。彼らは、分厚い氷に包囲され動くことができなくなった船を放棄し、生き残りをかけて重い橇を引き、ひたすら南を目指した。・・・「アグルーカ」とは、イヌイトの言葉で「大股で歩く男」を意味する。背が高く、果敢な性格の人物に付けられることが多かった。「アグルーカ」はフランクリンの死後、生き残りをかけて隊を率いたクロージャーのことだという。

その「アグルーカ」と呼ばれる男の足跡を求めて、2011 年 3 月、角幡は、北極冒険家の荻田泰永と二人で北緯 77 度 40 分に位置するカナダ北極圏のレズリュート湾を出発する。前半の約 60 日はジョアヘブンという町を目指してひたすら極北の島嶼部の氷った海上の氷の上を辿る旅である。時にフランクリン隊のエピソードを織り込みながら、極めてリアルに実体験を書き込むことで、その過酷な様子が目に見えるように伝わってくる。乱氷帯を越えるための苦勞の数々、シュラフの中での失禁、絶対的なカロリー不足により毎朝のウンコが日ごとに小さくなるという現実、ホッキョクグマの恐怖、空腹の中での麝香牛の射殺と罪悪感、空腹の中でナッツやカロリーメイト、チョコレートが 500g 入ったジップロック 1 袋を 3 万円出しても買いたくなるという極限状況・・・。「生きること」と「探検ということ」の本質がビンビンに伝わってくる。こうしてようやくたどりついたジョアヘブン。

しかし、二人の旅はこれで終わらない。後半は、船を捨てて南に向かった「アグルーカ」を追って彼らが目指したというグレートフィッシュ川を目指す。グーグルアースでいかに情報が手に入ろうとも、実際にその地に行ったものでなければ書けない真実は今でも間違いなくある。とはいえ、先に見える自分たちの旅は、地図すらない先の見えない「アグルーカ」の旅には遠く及ばないと、角幡はあくまで謙虚である。探検とは何か、彼らはなぜ探検を続けたのか、その答えは探検した者にしかわからない。

編集子のひとりごと



先日、修学旅行で大阪へ行く機会があったので、天保山に登って(?)きた。この山は知る人ぞ知る、日本で一番低い山である。山頂は 2 等三角点で、国土地理院の地形図にもちゃんと乗っている。標高 4.5m。海を望む山頂には、地元の天保山岳会という山岳会の立てた標識が立っていた。ちなみに山岳会では山岳救助隊も結成されているそうだが、これまで、救難要請は一度も出ていないそうだ。(大西 記)